

1 これまで3年間（H20～22年度）の取組について

1 児童・生徒の状況

(1) 学習事項の定着（学力）について

（成果）

全体の学力の向上については、やや向上しているのではないかと見ているが、上昇している教科もあれば、低下している教科もある。全国学力テストの平均正答率（全国比）より、本校の21年度と22年度の結果を比較すると、国語A(+0.09)、国語B(+0.01)、数学A(+0.009)であった。

学力低位層については、4科目ともに減少傾向にあり、国語Aの正答率40%以下は、一昨年度より2.18ポイント減少していた。国語力については、高学力層の割合はあまり変化しないまま、低学力層の減少が認められたため、一定の学力底上げの成果が得られたと考えられる。

（課題）

今年度も1/3の教職員が入れ替わり、本校の取組みをどのように継承・伝承していくかが課題である。教師の年齢層が若年化しているが、特に中堅教師が学校の取組みを推進する原動力として機能することと、若手育成をどのようにしていくかが大きな課題である。4人班での班活動をベースとしているのは「生徒一人ひとりに学ぶ権利を保障する」ことであるが、昨年度この班活動を徹底できなかった教科や授業があった。今年度も一度、本取組みを立て直すべく、教職員が班やコの字の意味を確認し、全教職員で取り組むことが必要である。また、学びの基本は知的好奇心であり、教え込むものではないと考えており、生徒の興味関心を示すような教材づくり、生徒たちが本物に触れて深く思考することのできる授業づくりに力を入れていくことが必要とされる。年度末総括の中でしっかり反省した上で今年度、および本校のステップアッププランを構築できるようしっかりと方針を立てて授業づくりを進めていきたい。キーワードは「授業で勝負」である。

(2) 「ゆめ力」「自分力」「つながり力」「学び力」の育成について

（成果）

ゆめ力=進路を考える力、自分力=選択する力、つながり力=思いやる力、学び力=考える力、学力として考えているが3年生の後半には、進路に向けて生徒同士が支え合い、進路を獲得して昨年度の学年を卒業させることができた。班のつながりの中で支え合うことで育ち、学力については班学習を通じて学び合うことができた。また、職業体験学習(1人1事業所)などキャリア教育の充実を図り、進路選択に向けて、こだわりを持たせることができた。本校の取組みの積み重ねにより3年生時の進路選択で4つの力は発揮されていると思われる。

（課題）

依然として生徒の家庭背景は厳しく、その様子は学習状況調査・生徒質問紙から読み取ることができる。1つは、自尊感情の低さであり、もう1つは家庭学習の環境の厳しさであると考えている。前者は、質問5～8において、府内比で3.4%(全国比7.6%)低い結果である。特に質問8の将来の夢や目標に対する数値が低かった。4つの力でいう「ゆめ力」に関わる部分でもある。後者は、質問1および21で一緒に食事をしている家庭が府内比で1.9%(全国比6.7%)低い結果で、保護者が食事の時間にはいないなどの状況にある。その一方で質問23の家の手伝いをしているかという問いについては府内比で3.7%(全国比2.4%)と高いことから、家庭背景の厳しさがうかがえ、手伝いをしなければならない状況におかれていることが示唆される。

つながり力の面では、質問34、38、41で、府内比で4.7%(全国比では-0.9%)高く、生徒の思いやりの気持ちが伺える。学び力は、質問48の授業内での話し合う活動について府内比46.5%(全国比26.8%)と非常に高く、本校の取組みの成果が表れている。また、質問53、63の国語、数学の勉強は比較的好きであることから、意欲的に取り組もうとしていることが読み取ることができた。生徒の厳しい課題はあるが、中学校生活の3年間で、4つの力をどれだけつけられるか、どのようにつけていくかが課題である。

2 学校の取組

(成果)

適宜、授業改革部会、人権担当者等と連携を取りながら、本年度予定されていた取り組みについて学校体制で行うことができた。中間総括で取り組みの進捗状況进行交流し、各学年の学力データとともに後期の方針を出し、教職員で確認した。また年度末総括の中で、うまくできなかった事や推進できなかった事など、教職員で反省点を出し合って今年度の方針をまとめた。今年度、約1/3の教職員の入れ替わりが生じたが、年度末に成果や課題を総括できたことが、4月からスムーズに本校の取り組みをスタートさせることができた要因となった。

地域の小学校と連携する三校合同授業研を年間に5回、校内の授業研究会を月に1回のペースで行った。研究会の在り方や授業づくりの取り組みなどを年度当初に確認して、また学年の学力保障担当者が学年のビデオ授業研究、学力向上担当者が校内の授業研究を進めていき、充実させることができた。

各学級(学年)では学力保障担当者が中心に学年の取り組みを考案した。学びのルールを学校独自につくり、どのクラスでも浸透するように生徒に伝えた。教科の授業改善については、年度当初に教科の研究テーマ、個人の研究テーマを設定し取り組んでいる。ビデオ授業研や授業参観を通じて検証し、年度末には教科で総括する。昨年度は、授業づくりについて共通理解できていなかった部分があったことから生徒へあまり浸透していなかったが、経験年数の少ない教師や新しく来られて間もない教師にとっては、1つ1つの積み重ねが次年度で生かされている。学校の一貫した取り組みを継続することで、教師のスキルアップが図られている。

毎朝の読書タイムは、テストや短縮時間割の日を除いて行った。また各学年において、定期考査前に放課後学習会や自主勉プリントの配布をする取り組みを行った。家庭学習の定着を目指す「自主勉ノート」の取組みは、全学年で行なうことができた。この自主勉ノートは、ページ数と定期考査の結果に正の相関があり、一定の成果が得られている。また、自主勉ノートのページ数をポイント表にすることで生徒の自主勉に対する意識の向上や、やる気を引き出す取り組みとして成果があった。

(課題)

課題は、『学校の取り組みとして新転任の教師に本校の取り組みの理解を得ること』と、『同僚性の構築』である。また、学力の向上に向けてきめ細やかな指導は引き続き必要であり、今後も習熟度別指導や学習支援者の活用により低学力層の底上げを図りたい。また、新2年生に対しては、生徒との関係づくりを大切にするために、丁寧な学級づくりを始めることも含めてユニット制の導入に至った。

昨年度は生活指導や部活指導、下校指導などによって時間内に研修の時間を保障することが難しかった。そのため今年度は、全校体制で本校の授業づくりが推進できるよう、年間計画内に授業研究日を設定したことで、時間を確保したことで計画的に進められるように改善した。さらに授業改革部会(学力保障部会)も毎月設定(定例化)し、部会の充実を図り本校の取り組みに邁進する。また、年度末総括の内容、今年度の方針を確認し、本校の具体的な取り組みの共通理解を図った。

授業改善において、各教科会議を持つことが時間的に困難であり、職員室で各教科の授業や教材についての話(交流機会)が増やせるように工夫する必要がある。教材づくりに費やす時間をどのように確保するか、教育課程と連携して改善する必要がある。また、意味のあるグループ活動にするため、教材を練ることが重要であり、具体的にどのようにすれば授業が練られるか、そういった研修ができるかを部会等で話し合っていきたい。

読書タイムや放課後学習会、自主勉ノートの活用については、小学校からの継続的な取り組みの成果もあり、中学校でも続いている。しかし参加する生徒や提出する生徒が限られていることもあるので、どのように呼びかけていくか課題である。読書タイムについても本を持っていない生徒にどのように読ませるかが課題である。

2

これから3年間（H23～25年度）の取組について

1 3年間の重点課題

重点課題	検証軸	25年度の到達目標
「聴き合い学び合う授業づくり」により 学力の向上を図る 学び力の育成 (自主学習・家庭学習の推進)	校内確認テスト 府学力テスト 全国学力テスト 自主勉ノート	国語、数学ともに70点以上 市内平均値を目指す 無回答率の減少 全員がノート1冊分を終えられるようにする。
学校体制での取り組みと同僚性の構築	授業アンケート 授業研究会 ビデオ授業研修 三校合同授業研	全教職員肯定的意見90%以上 月1回以上実施する 1人1回は行う
ゆめ力の育成 (進路学習、人権教育の推進)	不登校生徒率 高校進学率の向上 高校中退率の減少	10%以下にする(22年度長欠・不登校生徒約15%) 99%以上にする。 3%以下にする。

2 3年間の取組計画

3年間共通の計画	年度ごとの計画	
<p>小中連携の強化、授業改革部会を月1回の定例化 <小中連携>三校合同授業研の開催。全校体制で取り組む。中学校区で足並みを揃えた授業づくりを推進させる。 <校内>部会内で取り組み(研修内容)の確認、学年方針を確認、計画、実施を徹底する。またその間の取り組み内容の反省を毎回行い、次の計画を進める。四人班の活用・コの字は継続。 授業研・教材研修などの校内研修の充実 授業アンケート、従来の授業研究は継続する。さらに教材研修を、教職員でグループワークしたり、交流する機会を設ける。教材づくりのヒントにすること、教材を練ることが目的であり、また他教科と関連付けた授業内容も考案をしていく。分かりやすい教材提示にICTの積極的導入、推進をしていく。 学力向上に向けた取り組みの継続 読書タイム、放課後学習会、自主勉ノート、自主活動(生徒会活動)と連携した授業づくりを行っていく。 学力の各データ分析、考察、次年度の方針立て 確認テストの実施(経年比較)定期考査と自主勉の相関など。 学力向上の成果を数値で表わし検証する。 低学力層の減少に向けた取り組み</p>	平成23年度	<p>部会の適宜開催から定例部会へ。拡大学力保障の開催。 校内研修を学校体制で実施、時間の確保。教材研修の試験導入、検証、次年度の計画。ICT研修。継続して取り組みを行う。 1年次から学力データを追跡。エツト制、読書タイムに新聞を導入。テスト結果を追跡。 中高連携を密に。キャリア教育の充実。</p>
	平成24年度	<p>定例部会の継続。教師の異動も考慮して前年度の取り組みを継続。授業研と教材研修を並行して取り組む。授業実践例を増やす。自主活動の活性化。 数字による検証、分析を始める。新聞教育を各教科で導入。生活習慣改善に向けた啓発運動。継続。小中高連携の強化。</p>

<p>習熟度別学習の実施、ユニット制の導入、新聞学習の計画的導入、補習学習の実施。全国学力テストにて検証する。</p> <p>体力向上 食育や体の発達など教科を通じて生徒の意識を高める。あいさつ運動やボランティア活動、部活動などの自主活動の活性化を図る。</p> <p>ゆめ力の育成 職業体験などを通じて自尊感情を高め、目標をもたせる取り組み。最後まであきらめない進路決定までのプロセスの構築。</p>	<p>平成 25 年度</p>	<p>を継続、3年間の成果を検証。図書館利用状況、自主ノートと学力等の相関から分析、考察、検証。3年間の学力データを分析、考察。全国学力テストより分析・考察。スポーツテストにて検証。学習状況調査・生徒質問紙および生活アンケートより検証、分析。</p>
---	-------------------------	---

3 推進体制

